

小浜島の遺跡

仲 座 久 宜*

The Sites of Kohamajima Island

Hisayoshi NAKAZA*

はじめに

小浜島では、これまでに実施された遺跡分布調査等により、地籍上は字小浜に属する嘉弥真島の遺跡及び、近年になって新たに確認された遺跡を含めると、現時点で9ヶ所の遺跡が確認されている(図1・表1)。これらの遺跡は、1994(平成6)年に沖縄県教育委員会が行った分布調査^{註1}以降、その所在や状況等について確認が行われていない。

県内では、本土復帰を境としてリゾート開発や公共工事を中心とした開発行為により、環境は大きく改変されることになる。小浜島もその例にもれず開発が行われ、このことは遺跡周辺についても同様な状況が推測できた。今回の調査では、時間の制約上、発掘及び測量調査等を実施することは困難なため、従前行われた分布調査の追調査による現状確認及び、新たに発見された遺跡の状況把握を行い、さらに踏査時に採集した遺物を紹介することで、遺跡の性格

及び年代特定の助けとしたい。調査の期間は平成14年度・15年度の2次にわたり、それぞれ3日間の日程で実施した。なお、八重山諸島の時代区分については、県内外の研究者によりいくつかの編年^{註2}が提示されているが、ここでは早稲田大学八重山学術調査団による、いわゆる早稲田編年^{註2}を用いる。

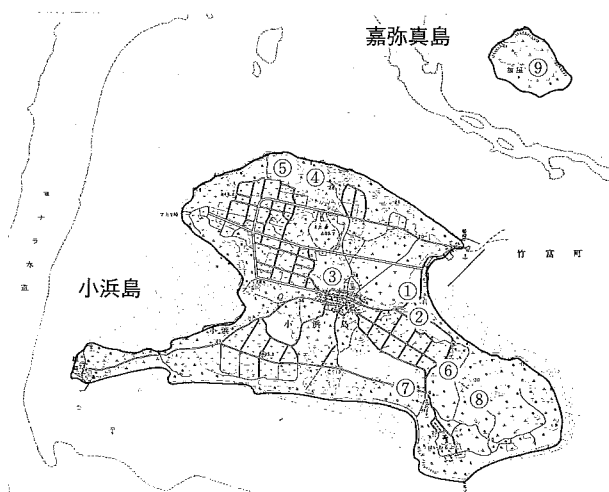


図1 小浜島の遺跡分布(表1参照)

表1 小浜島の遺跡一覧

| No | 遺跡名 | 早稲田編年 | 遺構 | 主な遺物 | 現況 |
|----|------------|----------|------|---------------|-----------|
| 1 | トゥマール貝塚 | 第I期 | — | 石斧、焼石、貝類 | サトウキビ畑 |
| 2 | ニシダ原遺跡 | 第IV期 | — | 陶磁器、土器、貝類 | 畑 |
| 3 | 小浜旧部落遺跡 | 第IV期 | — | 陶磁器 | サトウキビ畑 |
| 4 | ウテイスク山遺跡 | 第III期 | 石積み | 土器、陶磁器、石器、貝製品 | 山林 |
| 5 | ユンドウレースク遺跡 | 第III期 | 石積み | 土器、貝類 | 山林 |
| 6 | フルロウ山遺跡 | 第III期 | 石積み | 陶磁器、土器 | 山林 |
| 7 | 南風田原遺跡 | 第I期 | — | 焼石、貝類 | サトウキビ畑 |
| 8 | イハマムル遺跡 | 第III期 | 石列ほか | 土器、陶磁器 | 山林(ゴルフ場内) |
| 9 | 嘉弥真遺跡 | 第III・IV期 | 石積み | 土器、陶磁器 | 原野・山林 |

※ 〒903-0823 沖縄県那覇市首里大甲町1-1 沖縄県立博物館

* Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

小浜島の考古学研究史

八重山諸島の考古学研究は、南西諸島の中でも早い時期から行われる。ここでは、その中でも小浜島の調査・研究について、戦前・戦後に大別し、さらに調査ごとに区分けして紹介することで研究史としたい。

戦前の調査

八重山諸島の考古学研究については、西表島や石垣島の遺跡を皮切りに、田代安定や笹森儀助らにより明治期に始まることになるが、その時点では、中央の書物に遺跡の発見や表面採集による資料について報告される程度にとどまっていた。

その中で小浜島の考古資料について初めて言及されたのは、1894（明治27）年に『東京人類学会雑誌』に掲載された鳥居龍蔵による「琉球ニ於ケル石器時代ノ遺跡」^{註3}である。この中で鳥居は、西國男により石垣島、西表島、黒島、新城島、小浜島、波照間島からもたらされた石斧から、石垣島2点、西表島1点、波照間島1点の磨製石斧を図入りで紹介し、沖縄にも石器時代の遺跡が存在することを確信した。その後鳥居は、1903（明治36）年頃に文教大学で言語学の講義を聴講していた伊波普猷と出会い、1904（明治37）年に、伊波が沖縄帰省の際に同行して人類学調査を行う。その際鳥居は、本島各地の史跡等をめぐりながら、伊波貝塚、萩堂貝塚等の遺跡を発見し、その土器の特徴から、沖縄の土器が九州の縄文文化に属するものとして位置付けた^{註4}。

鳥居はその後、小浜島には上陸していないが、宮古・八重山にも赴いている。石垣島の川平貝塚では発掘調査を行い、出土した土器の特徴が沖縄本島の土器と著しく異なることから、その系統を異にすることを指摘した上で、側面に把手を有するその土器に「外耳土器」の名称を与えた^{註5}。これらの見解は、今日の学界でも有効なものであり、短期間の調査により、その地域の文化的特質を的確に捉えることができる鳥居の観察眼の正確さが窺える。

このように、小浜島の考古資料については、一部であるが八重山諸島の先史文化として早くから認識されるようになる。鳥居の調査後、八重山の考古学的調査はしばらく行われず、次に文献上に小浜島の

名称が現れるのは、1940（昭和15）年に三宅宗悦がまとめた「南島の先史時代」^{註6}であるが、掲載資料は先に鳥居が論じた磨製石斧である。

このような状況で戦前の小浜島に関する調査については、県外の研究者による断片的なものでしかなく、本格的な調査が行われることはなかった。

戦後の調査

第二次世界大戦により、沖縄は甚大な被害を被った。それは多くの文化財にしても同様で、遺跡は戦場へと変わり、これまで収集されてきた考古資料を含む貴重な文化財資料も失われてしまった。しかし、このような状況下でも八重山の考古学研究の勢いは衰えることなく、むしろ戦前より盛んに行われるようになる。特に多和田真淳、高宮廣衛、大濱永巨ら県出身者による地道な調査・研究の功績は大きく、その後の八重山考古学研究に大きな影響を与えた。

ここでは、1945（昭和20）～1974（昭和49）年を学術目的の調査が主体であったことから、「戦後の調査Ⅰ」とし、1975（昭和50）年～2001（平成13）年は、教育委員会等が行った開発時の事前協議資料の作成を目的とした調査が中心であることから、「戦後の調査Ⅱ」として前後に分けて紹介する。

・戦後の調査Ⅰ（1945～1974年）

（1）多和田真淳による調査

沖縄では、1945（昭和20）年の第二次世界大戦で壊滅的なダメージを受けたことにより、しばらくの間考古学的調査が行われた痕跡はない。しかし、沖縄考古学の先駆者である多和田真淳氏らによる精力的な調査により、1954（昭和29）年頃から県内各地において多くの遺跡が発見され、その分布状況や性格が報告されるようになる。

小浜島に関しては、多和田氏が1955（昭和30）年に訪れた際、フルロウ山遺跡、南風原（南風田原）遺跡、小浜旧部落遺跡を発見し、「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」^{註7}の中で紹介している。

当時、八重山先史文化の流れについてはまだ模索の段階であったが、1960（昭和35）年、早稲田大学八重山学術調査団により「無土器→有土器」とする見解が提示される^{註8}。しかし、多和田氏は前論考の中で、この早稲田大学による見解に先行して「有土

器→無土器→有土器」の見解を指摘し、その後の編年研究への糸口を開いている。

(2) ジョージH. ケアによる調査

アメリカの人類学者であるジョージH. ケア氏により、琉球政府立博物館とホノルル美術館合同の琉球文化財調査が、1961(昭和36)年～1963(昭和38)年に行われた。ケア氏は琉球列島遺跡調査として県内各地を調査する中、小浜島へも足を運んでいる。小浜島での資料採集地は南風田原遺跡(Haebana Site)、仲宗根村(Nakasone Village)、ニシダバル(Nishidabaru)、道路(Road Side)、ヤサカ遺跡(Yasaka Site)の5ヶ所^{註9}である。採集資料は土器や陶磁器が中心であるが、資料の詳細な内訳についてはこれまで公表されていなかった。そこで本稿では、ケア氏が採集した小浜島採集資料の内訳をまとめ、後に紹介する。

(3) 琉球大学歴史研究会による調査

1966(昭和41)年9月、琉球大学歴史研究会は石垣島及び小浜島の調査を行い、石垣島で10ヶ所、小浜島で5ヶ所の遺跡を踏査している。この中で報告されている小浜島の遺跡で、ウテイスク山遺跡以外の4遺跡は現集落周辺にあたることから、小浜旧部落遺跡と関連する遺跡と考えられる。踏査時に採集した土器片の集計、計測、分類が実測図とともに『歴史研究 第3号』^{註10}の中で報告されている。

(4) 琉球政府立博物館による調査

1967(昭和42)年5月、琉球政府立博物館の玉城盛勝氏は、八重山諸島考古学調査の際に小浜島を訪れ、泊遺跡(トゥマール貝塚)から採集した6点の石斧を『琉球政府立博物館館報』^{註11}に紹介している。この中で玉城氏は、泊遺跡のほか小浜旧部落遺跡及びフルロウ山遺跡の位置を明示しているが、その詳細については記述していない。

(5) 沖縄大学学生文化協会による調査

沖縄大学の沖縄学生文化協会は、黒島、波照間島、西表島に続いて、1974(昭和49)年に小浜島の村落の変遷過程について考古学的調査を行い、その成果を『郷土』^{註12}にまとめている。調査は、現集落をA

～Cの3ブロックに分け、さらに旧集落と関連すると考えられる御嶽周辺を調査することにより、地点ごとに採集した遺物の構成から集落の移動・拡張の変遷を考察しようと試みた。しかし、海岸周辺に散在していたヤサキ村、クァンテ村、カニク村等の集落が明和の大津波以降に移動し、現集落にまとまったとする伝承^{註13}を裏付ける結果は得られていない。

・戦後の調査II(1975年～2001年)

(1) 遺跡詳細分布調査

沖縄県教育委員会は、本土復帰を境に増加の一途をたどる大規模開発から、県内に所在する埋蔵文化財を適切に保護することを目的に、1977(昭和52)年に県内全域を対象とした遺跡分布調査報告書を刊行した^{註14}。この中で小浜島の遺跡は4遺跡が掲載されている。その後、竹富町、与那国町に地域を限定した詳細分布調査を行い、1980(昭和55)年に『竹富町・与那国町の遺跡—詳細分布調査報告書—』を刊行する^{註15}。この中で小浜島では8ヶ所の遺跡が報告されており、前回の分布調査結果に加え新たに4遺跡を追加している。

(2) グスク分布調査

沖縄県教育委員会では、県内に所在するグスク及びグスク時代の遺跡の実態調査を行い、グスク分布調査報告書をまとめている。報告書は、I. 沖縄本島及び周辺離島、II. 宮古諸島、III. 八重山諸島の3分冊となっており、その内容はグスクや関連する古島、元島等の集落跡をも網羅したものである。八重山諸島編は1994(平成6)年に刊行され、その中で小浜島のグスク時代相当期の遺跡は6遺跡が報告されている^{註16}。その内ユンドゥレスク遺跡及びウテイスク山遺跡の石積みの概略図を紹介している。

(3) 開発に係る調査

復帰後、県内各地で大規模開発が行われるようになり、遺跡の緊急発掘調査も増加の傾向にあった。小浜島も例外でなく、大型リゾート施設の建設や農地改良、採石等の開発の波に乗せられることになるが、幸いなことに遺跡地内での開発は行われておらず、現時点で緊急調査の実績はない。

しかし、2001(平成13)年1月、島の南東部で行

われていたゴルフ場造成の際に、新たな遺跡が発見された。竹富町教育委員会は開発業者と遺跡の取り扱いについて協議した結果、ゴルフ場のコースレイアウトを変更することにより、現状のまま保存することで双方合意した。ここでは開発業者の協力のもと、町教育委員会の文化財担当職員が迅速に対応したことで破壊は免れたが、発見が遅れていたらその所在すら知られることなく、造成されてゴルフコースへと変わっていたことであろう。遺跡名は当初、隣接する御嶽の名称からアールムティ遺跡としていたが、小浜在の松原浩氏により、遺跡の丘陵が古くからイハマムルと称されていることを教示いただいたことから、イハマムル遺跡を命名し、現在もゴルフコース内に鎮座している。遺跡の概要については次項で記す。

遺跡の概要

今回の調査では、これまでに実施されてきた分布調査等の成果をもとに遺跡を踏査し、現況を再確認することに主眼を置いた。また、新たに発見された遺跡については、関係する方々から発見に至る経緯及び発見時の状況等を聴取しながら踏査を行い、その性格究明に努めた。ここでは、遺跡ごとにその概

要を説明するとともに、今踏査で採集した資料と合わせ、過去に収集された資料も一部図示し解説する。

①トゥマール貝塚・・・・・・・・・・第I期

小浜港の南側海岸近くに位置する無土器の遺跡である(写真1)。1967(昭和42)年に琉球政府立博物館の玉城盛勝氏が八重山諸島の考古学調査の際に発見した遺跡で、玉城氏はその際に6点の石斧を採集し、『館報』^{註17}の中で実測図とともに紹介している(図2)。続いて沖縄大学の沖縄学生文化協会が1974(昭和49)年に実施した調査では^{註18}、多量の貝類とともに土器片が採取されているほか、大濱永亘氏も数十点の石斧とともに、貝製品等を採集し

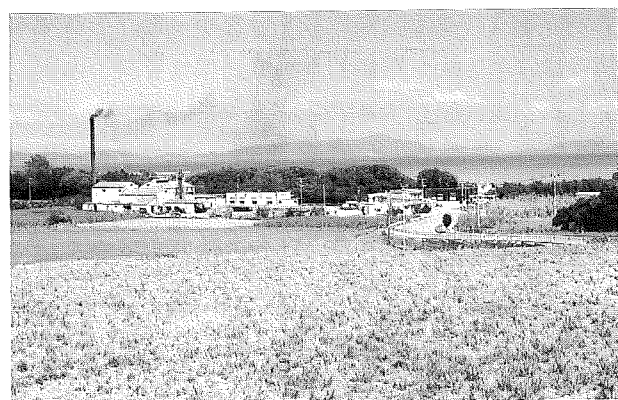


写真1 トゥマール貝塚遠景

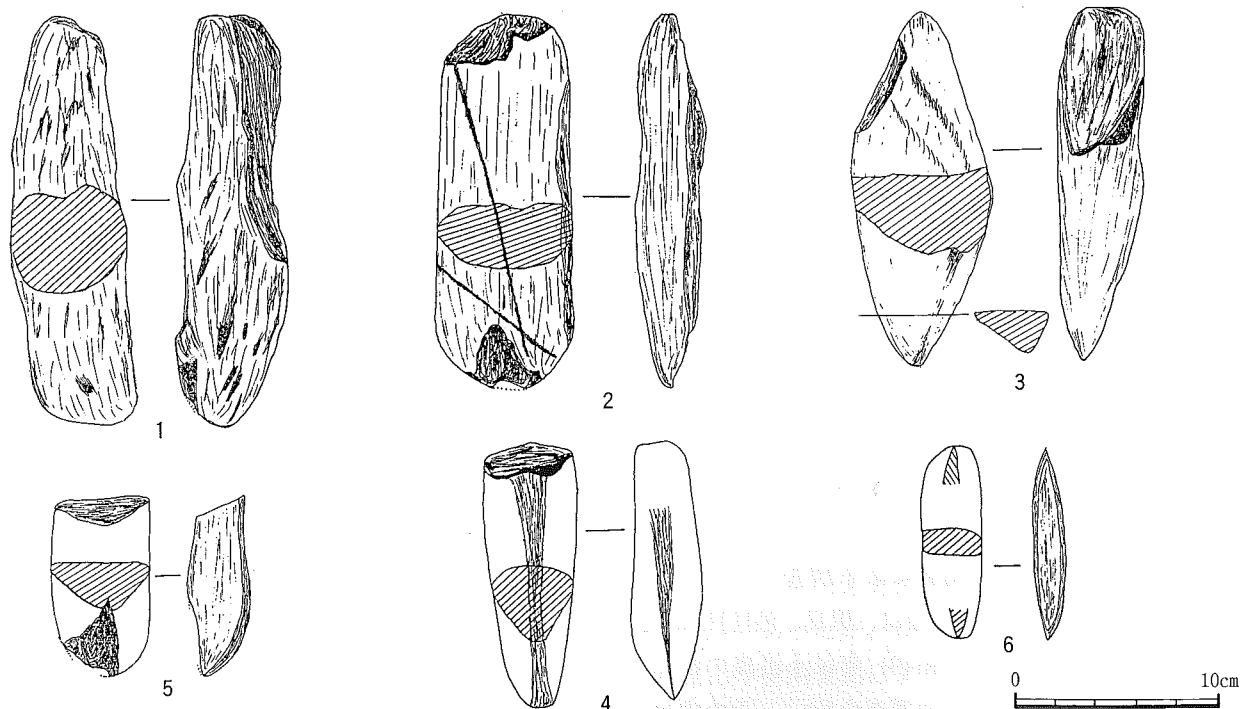


図2 トゥマール貝塚採集石斧(『琉球政府立博物館館報』1969年度版より)

ている^{註19}。しかし、本遺跡は基本的に無土器の遺跡であることから、沖縄大学が採集した土器等の資料は、南側に近接するニシンダ原遺跡から採集された可能性がある。

現在はサトウキビ畑になっており、その灰色砂の地表には耕作により多くの貝類及び焼石が露呈している状況が見られた。今踏査では石器等の人工遺物は確認できず、シャコガイやサラサバティ等の大型貝類の破片を中心に、ほかに石材が含まれている状況が確認できた。なお、本遺跡では製糖工場建設時に石器や人骨が出土した^{註20}という情報もあるが、その際の詳細な状況及び遺物の所在は不明である。

②ニシンダ原遺跡・・・・・・・・・・第IV期

トゥマール貝塚の南側海岸線に接する近世の遺跡である(写真2)。多和田氏が小浜島で調査を行った1955(昭和30)年12月にはすでに知られており、本遺跡を旧部落と関連させて「新しいものようである」^{註21}としている。その後ジョージH. ケア氏によって土器片が採集されている^{註22}。

今回の調査では陶磁器片、土器片、自然遺物を採集した。遺物は観光バス会社の南側畑地、オオハマボウなど海岸林の内側に多く見られ、その散布状況から海岸林内部にも広がっている様子が窺える(写真3)。灰褐色砂の畑には、シャコガイ、イモガイ、サラサバティなどの大型貝類が白く目立ち、焼石をわずかながら伴っている。人工遺物の量は少なく、土器細片が多い。表面採集した資料から、土器口縁部1点、褐釉陶器口縁部1点を紹介する。

図3の1は土器の口縁部で、口径は不明。わずかに残る口唇断面は舌状に尖り、ゆるやかに外反する。器厚は6mmと薄手で、小型の壺になるものと思われる。焼成は良好で、外面には横位に擦痕が見られる。器色は橙褐色を呈し、胎土に微砂粒及び貝片を含む。

図3の2は褐釉陶器壺の口縁部で、推定による口径は18cm。口唇上面は平たく鐔状にのび、口唇上部からS字を描くように胴部へ移行する。口縁内面は、蓋受けと思われる隆帯を経て、鋭角に胴部へと至る。釉色はつや消しの茶色で、口唇外側及び口縁脇のくぼみ、口縁内面下部には釉溜りにより、周囲より濃色を呈している。釉全体に細かい貫入が見られ、口唇角の部分では貫入に沿って剥落している。



写真2 ニシンダ原遺跡遠景

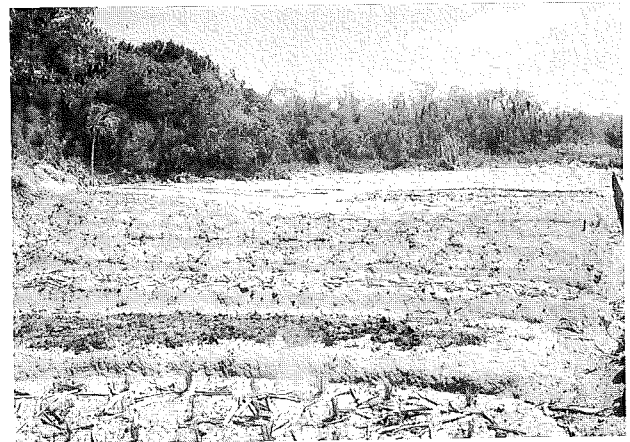


写真3 ニシンダ原遺跡近景

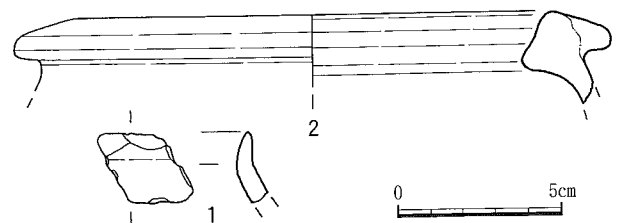


図3 ニシンダ原遺跡採集遺物

③小浜旧部落遺跡・・・・・・・・・・第IV期

小浜旧部落遺跡は、多和田氏により「この遺跡は津波のため180年前に西方台地に移動した旧部落跡である」^{註23}と報告されている近世の遺跡である。津波とは1771(明和8)年に起こった明和の津波を指す。現小浜集落の北西側一帯、クバントウと呼ばれる地域が集落跡とされ、県教育委員会が行った分布調査^{註24}では、沖縄産陶器をはじめとした近世の陶磁器片及び土器片が採集されているが、今回の調査では確認できなかった。現在はサトウキビ畑が広

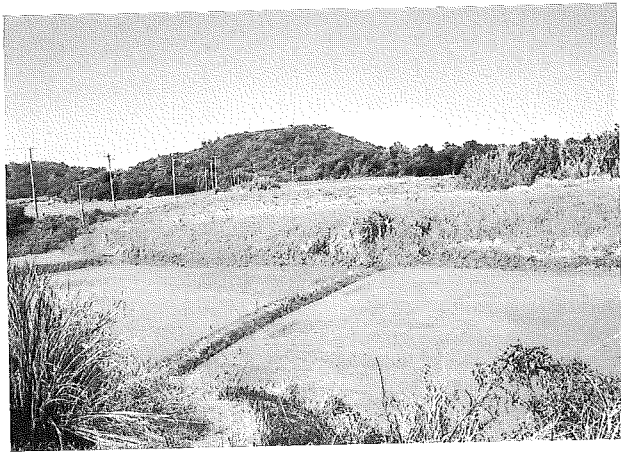


写真4 小浜旧部落遺跡遠景

がっており、その中に仲山御嶽、佐久伊御嶽、嘉保根御嶽が点在している(写真4)。畑の形状から区画整理が行われた形跡はないが、一部に盛土されている状況が見られたことから、遺跡は埋められている可能性が考えられる。

④ウティスク山遺跡・・・・・・・・・・第Ⅲ期

ウティスク山遺跡は島の北側中央部に位置する遺跡である。遺跡周辺は、復帰後に行われた大規模なリゾート開発により、コテージ等の建物が多く建てられ賑わったが、現在は廃業し、物件は売別荘へと変わっている。また、遺跡一帯は良質の石灰岩の産地でもあることから、一時は採石の危機にもさらされたが、幸いにも破壊されず、地形は往時の状態を保っている(写真5)。

リゾート施設内の通路から、急勾配の深い森を分け入ると、頂上付近に琉球石灰岩の石積み配した平場が数枚確認できる。石積みは崩壊が進み、かなり拡散しているが、その延びやつながりについては地形の状態等を勘案することで読みとることができた。その区画等については、別項に縄張図が掲載されているので参照していただきたい。平場の一角には土器片が多量に見られ、ほかに石器片及び貝製品を採集することができた。採集資料の内訳は、土器片46点、石器1点、骨製品1点、貝製品1点である。その内11点を報告する。

図4の1は外反する土器の口縁部で口径は不明。口唇断面は隅丸の台形で、口縁断面は緩やかな「く」の字状を呈する。外面下部は1段稜を付けて盛り上がり、胴部へほぼ垂直に落ちる。器厚は口唇部で5

mm、口縁下部で8mmを測る。色調は淡茶褐色で焼成は良好。胎土には微砂粒がわずかに見られる。

図4の2は皿状に浅くなると思われる土器の口縁部で、口径は不明。口唇断面は破片下部より厚手で丸く、わずかに内湾する。器厚は最大で5mmを測る。焼成は良好。器色は茶褐色で表面に石灰分が付着し、胎土には微砂粒を含む。図4の3は外傾する土器の口縁部で、口径は不明。口縁断面は口唇部が厚めに成形され、内側で舌状に尖る。焼成は良好で器厚は6mm。胎土には微砂粒が見られ、裏面に石灰分が付く。

図4の4は土器の外耳部分である。断面観は「ト」の字状で、外耳部分は上面が外側に向けて傾斜し、下面はほぼ水平で器壁から約17mmのびる。上面観は中央及び両端に弱い角を有する形状で、表面には指頭押圧及び指ナデと思われる調整痕が見られる。正面からの形状は浅いかまぼこ型である。器厚は8mm内外で、焼成は良好。色調は器壁が内外ともに暗褐色で、断面は茶褐色を呈する。胎土には微砂粒が入り、表面に石灰分が貼り付く。

図4の5も外耳の資料である。外耳の先端部はわずかに欠けているが、その断面は外側に薄くなりつつ、器壁からほぼ水平に約1cmのびる。器厚は破片上部が7mm、下部が11mmとなっている。焼成良好で色調は表が赤褐色、裏面が黒褐色化しており、石灰分が付く。胎土には貝の碎片が多く見られる。

図4の6～8は土器の底部資料である。断面は内外面とも底面からゆるやかに丸く胴部へと立ち上がる資料がほとんどであるが、6の資料は底面から直に立ち上がり、稜を付けて外傾しながら胴部へと至



写真5 ウティスク山遺跡遠景



図4 ウテイスク山遺跡採集遺物

る形状をしている。底径はいずれも不明で、器厚は6mm~11mm。器型は概ね鍋型になるものと思われる。焼成はいずれも良好で、外面が赤褐色、内面が黒褐色を呈する点で共通している。胎土には微砂粒を含み、表面に石灰分が付着している。

図4の9はイモガイ科の製品である。側面部に幅0.7mmほどの太さで、断面が「V」字状の溝が縦方向にやや不規則に刻まれていることから製品としたが、用途については不明である。輪郭は風化及び摩耗が進んでいることから、本来の形状は窺い知れないが、現状のサイズは、縦が約29mm、横が約40mmの方形を呈している。

図4の10はメジロザメ椎骨製品である。長径18mm、厚さ7mm。中央部の薄くなった箇所径2mmの穴が開けられている。

図4の11は石器の半欠品である。砂岩製で、半月形の縁辺に敲打痕が見られる。縦50mm、横56mm、厚さ19mmである。

⑤ユンドゥレスク遺跡・・・・・・・・・・第三期

ユンドゥレスク遺跡は、島の北側海岸線に突出した琉球石灰岩台地上に位置する遺跡である。周辺は、島の人でもあまり立ち入らないような深い森に包まれているため、位置を特定するのに難渋したが、竹富町教育委員会教育長の黒島精耕氏らの案内により辿り着くことができた(写真6)。

深い森の内部は、八重山でグスクを意味する「スク」を名乗るのに相応しく、累々と琉球石灰岩の野面積みによる石積みが積み、いくつもの区画に分けられていた。中でも、入口部に小規模だが馬出しと見られる区画が明瞭に残されていることから、保存の良好さを確信した(写真7)。

数枚の平場を経て内部へ進むと、中央部に香炉が配置された広めの平場があり、そこから海側に構築された数枚のテラスを越えると海へ通ずる。海岸は遠浅の岩礁で砂浜はほとんど見られず、北東側の対岸には嘉弥真島が望める。海に面する岩礁には、波により深く抉られたノッチと、崖に沿って積まれた石積みとが、海からの侵入者を硬く拒んでいる様子が窺えた。石積みは高いところで2m以上あり、それが幾重にも連なっている(写真8)。

今踏査では深い森林に阻まれ、全体を把握するに

は至らなかったが、石積みのつながりから複雑な構造を有する遺跡であることが理解できた。遺跡の縄張りについては、別項を参照していただきたい。今踏査で遺物の確認はできなかったが、以前の分布調査の際、土器片と貝類が採取されている。



写真6 ユンドゥレスク遺跡遠景(北岸から)



写真7 ユンドゥレスク遺跡内石積み(入口)



写真8 ユンドゥレスク遺跡内石積み(内部)

⑥フルロウ山遺跡・・・・・・・・・・・・・第三期

多和田真淳氏により1955（昭和30）年12月21日に発見された遺跡である。多和田氏はその状況を「小浜島の東海岸西平田原の奥にある岡で岡の上が住居跡で珊瑚礁崖下から外耳土器、青磁破片が得られる」と記している^{註25}。

遺跡は島の南東部に突き出した半島のくびれ部分に位置する。標高約32mのほぼ南北にのびる丘陵北側を占めており、遺跡へのルートは北側海岸から砂丘を越え、防潮林の中を歩いていく（写真9）。丘陵の麓から斜面にかけ、鬱蒼とした竹林が覆っており、容易に入り込めない。この竹は地元で「カラタギ」と呼ばれ、八重山古典芸能で奏でられる横笛の原材料になるという^{註26}。木々をかき分けながら崖を数メートル登ると、内部は数枚の平場によって区分けされ、その縁辺に琉球石灰岩の野面積みによる石積みが廻らされている。北側は急峻な崖で、木々の間からは海が望めるが、南側は緩やかな傾斜で竹林が埋め尽くしている。このような地形から、南側の石積みは北側の石積みに比べて高さ、幅ともに強固に作られているようである。

石積みに用いられる石は、最大でも人頭大程度のもので、現状はかなり崩れて拡散しているが、大方の輪郭は確認できた。平場は3枚ほどが確認でき、最高所の楕円形をした平場からつながるように、北及び東側に次の平場が延びている状況である。東側の斜面には、虎口様の形態を有する場所が確認できたが、深い竹林の壁と石積みの崩壊により詳細は判然としない。

遺物は最高所に位置する平場の北側周辺に比較的多く見られ、そこから流れ落ちたと思われるものが、わずかに斜面や崖下に見られた。採集遺物は11点で、その内訳は土器片が8点、褐釉陶器片2点、白磁片1点である。ここでは、その内の5点を図化し、紹介する。

図5の1は白磁碗の口縁部である。ピロースクタイプ碗^{註27}と称されるもので、図上復元による口径は14.4cmを測る。口唇端はやや内傾し、断面は舌状に尖る。器厚は口唇で5mm、胴下部で9mmを測る。釉の色調は外面が半透明の青みを帯びた黄色で、内面は半透明の薄黄色である。いずれも細かい貫入が密に見られる。胎土中には間隙が多く見られ、色調

は黄色みを帯びており、陶器様で焼きは良好と言えない。口唇外面に弱い稜をつける。破片下部に無釉の部分が見られる。ろくろ痕が均一でなく、成形及び焼成時に生じたと思われるあばたや傷が目立つ。内面は、口唇端から12mm下に細く浅い沈線が1条廻らされているほかは無文である。釉は外面より厚く、クリアで均質である。年代は13世紀末～14世紀中頃に位置付けられている。

図5の2は褐釉陶器壺の頸部片である。破片下部には1条の隆帯が廻らされている。釉は外面につや消しの暗褐色釉が施され、隆帯の上下で明茶褐色に発色している。裏面は横位のろくろ痕とともに、釉が薄くなでられ、赤褐色を呈している。器厚は最大で10mmと薄手であることから、小型の壺になるものと思われる。

図5の3は土器の口縁部で口径は不明。傾きはやや内傾するものと見られ、器型は鉢型になると思われる。口唇断面は丸く、その直下よりやや厚手に成形されている。口唇の厚さは7mm、口縁下は5mmと薄く、胴部へ移行するにつれ、膨らむものと思われる。整形は丁寧で、焼成は良好。胎土に貝の碎片をわずかに含む。色調は口唇部が茶褐色で、ほかは煤により黒褐色化している。図5の4も土器口縁部で口径は不明。わずかに内湾する資料で、口唇断面は丸く、厚さ7mmと少々厚手に成形されている。胎土には貝の碎片が多く含まれ、焼成は良好。器色は茶褐色で、表面に白い石灰分が付着する。

図5の5は土器底部で、図上復元による底径は、15.4cmを測る。小型の鍋型土器で焼成は良好。底面から胴部にかけての角度はほぼ直角。外面角は粗く



写真9 フルロウ山遺跡遠景

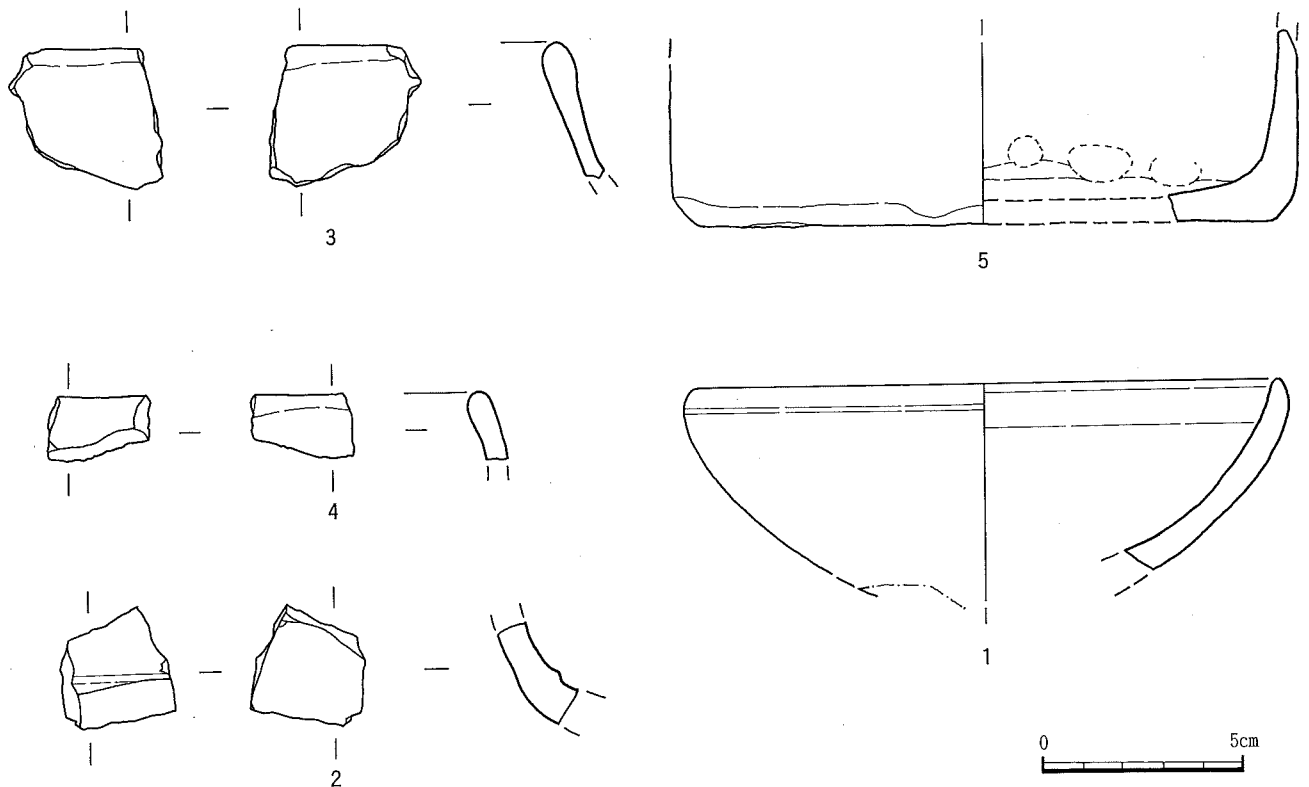


図5 フルロウ山遺跡採集遺物

面取りがされ、内面角には指頭痕が横位に3ヶ所確認できる。器厚は胴部が5mm、底部が8mm、角の部分が11mmと全体的に薄手である。胎土には粗い貝の碎片が多量に含まれ、外面に浮き出ているため凹凸があり、煤で黒褐色化した上に、石灰分が付着している。内面は茶褐色で、横位にナデによる調整痕が全面に見られる。

⑦南風田原（ハインダバル）遺跡……第Ⅰ期

多和田真淳氏により1955（昭和30）年に発見された遺跡である。遺跡の名称は、発見時には「小浜島南風原遺跡」^{註28}と称されていたが、後に正式な地名に倣って南風田原遺跡に修正している^{註29}。報告の中で多和田氏は「南海岸田地に夥しく貝が散布しているが新しいもの」としている^{註30}。

現在はサトウキビ畑になっており、砂地の畑にはシャコガイやサラサバテイ等の大型貝類が広範囲に散布しているため、面白く見える（写真10）。中には焼けて灰色に変色した石や貝類の破片なども見られることから、焼石による調理法を行っていた可能性が考えられる。人工遺物の確認はできなかった。



写真10 南風田原遺跡遠景

⑧イハマムル遺跡……第Ⅲ期

イハマムル遺跡は2001（平成13）年にゴルフ場造成のための測量時に発見された遺跡で、竹富町教育委員会文化財担当者の迅速な対応及び、開発業者の協力により、開発計画を変更し保存されることになった遺跡である。

遺跡は島の南東部、フルロウ山遺跡の南東側に位置する。開発以前は湿地帯に囲まれた小高い丘であったが、現在はゴルフコース内に山林の状態が残されている（写真11）。

標高約30mの北西から南東方向にのびる楕円形をした丘は、現地で古くからイハマムルと呼ばれ、武士が暮らしていたとする伝承^{註31}が残る場所であり、丘を意味するムルの周辺一帯は、水田が広がっていたという。丘は現在、低木で覆われている。その中に分け入ると、数枚の平場が設けられ、斜面には等高線状に土留めと見られる石列が配された状況が確認できた。内部には竹が密生しているため、詳細な範囲や形状をうかがい知ることはできないが、人為的に手加えられているのは確かである。発見の発端となった重機により開けられた測量用の通路に、遺物包含層の断面が露出しており、そこから流れ出たと思われる土器片24点を採取した。その内、特徴的な3点を図化したので報告する。

図6の1は土器の口縁部で口径は不明。口縁端は直口で、20mmほど下ると外側に折れ、厚みを増しながら胴部へと移行していく。焼成は悪く、触れると粉が手に付く。口唇断面は丸い。表面は凹凸が多く、茶褐色を呈する。裏面は煤けて黒褐色化しており、断面は橙褐色を呈する。胎土には微砂粒を含んでいる。器厚は口唇で6mm、破片下部で10mmを測る。

図6の2も土器口縁部である。口唇は外反し、頸部で緩やかに折れて胴部へと広がるタイプの土器と思われる。焼成は良好だが、器面はあばた状で、断面にも隙間が見られる。口唇断面は丸く、器厚は最大12mmである。胎土には砂粒がわずかに見られる。

図6の3は土器の頸部片である。口唇は欠損して

いるが直上にあると見られる。かなり弧状に湾曲することと、器厚が約6mmと薄手であることから、小型の壺になると思われる。色調は全面茶褐色を呈し、胎土には微砂粒がわずかに混入している。



写真11 イハマムル遺跡遠景

⑨嘉弥真遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・第Ⅲ・Ⅳ期

嘉弥真島は、小浜島の北北東約1.6kmに位置する周囲約2kmの島である。現在は栈橋やゲストルームが設けられ、夏場は無人島ツアーと称した定期便により、多くの観光客が訪れている（写真12）。

島は従来無人島であったが、近世になると小浜島の島民が通って田畑を耕作したり、牧場として使用していたとされる^{註32}。また、島の周辺は船の避難場所として良好な海域であったことから、当時の八重山在番は治安維持等を理由に、1751（乾隆16）年

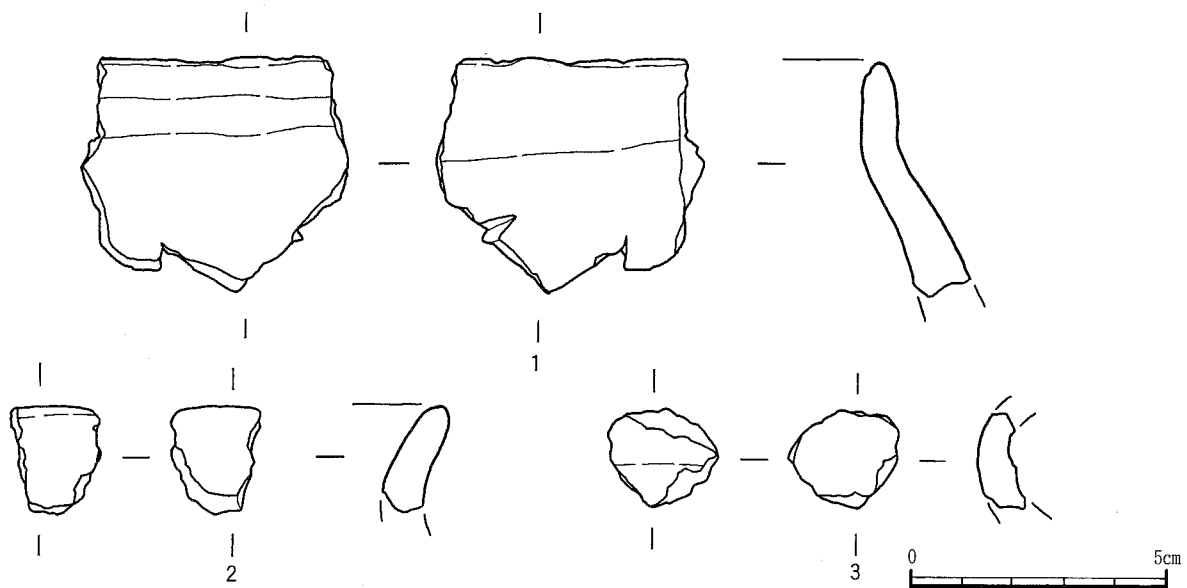


図6 イハマムル遺跡採集遺物

に小浜島の百姓を移住させて津口の管理をさせるよう八重山蔵元を通して王府に上申するが、認められなかったことが、首里王府と八重山蔵元との往復文書集である「参遣状」に遺されている^{註33}。このように、歴史の上で嘉弥真島は耕作及び放牧のための一時的な滞在の場として使われることはあったが、基本的に無人の島であったようである。

島の内陸部には、観光用のトレッキングコースとして、ゲストハウスを中心に原野の中に小道が広がっている。今回の調査では可能な限りこの小道及び周辺原野・島の外周の踏査を行った。

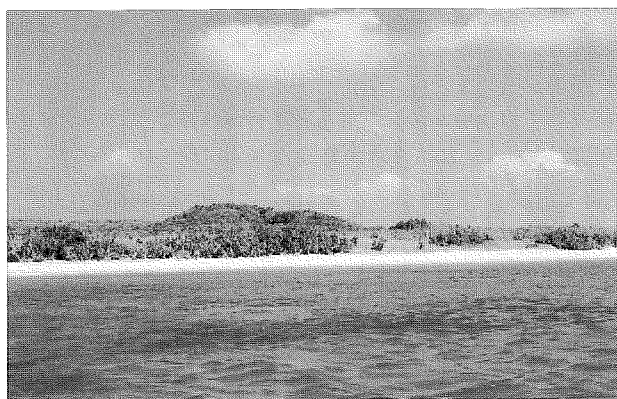


写真12 嘉弥真遺跡遠景

その結果、小浜島及び石垣島が望める南東海岸周辺の数ヶ所において、灰色砂に包含された状態で、サラサバティやシャコガイ等の大型貝類が多量に包含されている状況が確認できた。人工遺物は見られないが、自然に堆積したものではなさそうなので、貝塚の可能性が高いと思われる。なお、県が行った分布調査^{註34}では、島の東側に位置する小高い丘に、遠見台と考えられる石積みをも有する遺構が確認されているが、今回は深いヤブに阻まれて確認することができなかった。

表面採集による遺物は、島の南東側低地及び標高約31mの島の最高所付近の小道に見られた。遺物の構成は、前者が土器片及び沖縄産無釉陶器片であるのに対し、後者は15世紀頃の中国産陶磁器が占める割合が高く、年代に開きがある。このことから、嘉弥真島には少なくとも二時期の遺跡が存在する可能性がある。次に採集資料について説明する。なお、図7の2、10、11は島の南東部採集資料で、それ以外は小道からの採集資料となっている。

図7の1は土器の外耳部分である。全体に風化が進み凹凸が目立つ。両端及び先端部はわずかに欠損しているため詳細な形状は判然としないが、外耳上面の断面形状は斜位に傾き、下面はほぼ水平。器壁は外耳上部が9mm、下部が6mmである。器色は橙褐色で、胎土は灰色、間隙が多く混入物は見られない。

図7の2は、口唇端が外反する青磁碗の口縁部である。図上復元による口径は17.6cmを測る。釉はつや消しの淡緑色で、粗く貫入が見られる。器厚は5mmで、胎土は灰色である。図7の3も外反する青磁碗の口縁部であるが、2の資料に比べ緩やかに外反していくタイプである。釉は厚手でつやのある暗緑色。器厚は4mmと薄く、胎土は灰色を呈する。

図7の4も青磁碗口縁部である。口縁はやや外傾する直口で、淡緑色の釉が厚くかかる。全面に細かい貫入が見られ、表面は二次的に火を受けたのか発泡し、一部ではシワが形成され変形している。

図7の5は青磁碗底部である。釉は薄手でやや光沢のあるうぐいす色を呈し、全体に細かい貫入が見られる。見込部分には唐草文のスタンプが押され、高台角は粗く面取りが施されている。畳付け及び高台内中央は無釉で茶褐色を呈すが、高台の内側角には輪状に釉が残る。胎土は明灰色である。

図7の6・7は白磁碗の口縁部である。6の資料は口径不明。口唇は外反し、その直下でわずかにすぼまり、少々ふくらみつつ胴へ移行する。外面に不規則なるくろ痕が見られる。釉は透明で内外面ともに貫入が走る。色調は表面が明灰色で胎土は灰色。器厚は口唇が4mm、胴が5mm。7は図上復元による口径17.8cmの端反りの碗で、形態は6の白磁に似るが、器厚は口唇・胴部ともに5.5mmとやや厚手。釉薬は半透明で胎土ともに灰白色を呈する。

図7の8・9は褐釉陶器口縁部である。8は推定口径9.8cmを測る玉縁口縁の壺である。頸部で緩やかにびれを成して胴部へ移る。光沢のある黒褐色の釉が薄く全面にかかる。9も褐釉陶器壺の口縁部で、復元口径は10.6cmを測る。口唇断面は上部は丸く、外側は鉤状に湾曲している。淡褐色の釉が口唇外面にかかる。胎土には8・9ともに灰褐色で、茶褐色、橙色、白色の粒子が混入する。

図7の10は沖縄製の播鉢口縁部で、復元口径は27.4cm。口唇は鏝状に張り出し、断面は方形。口唇

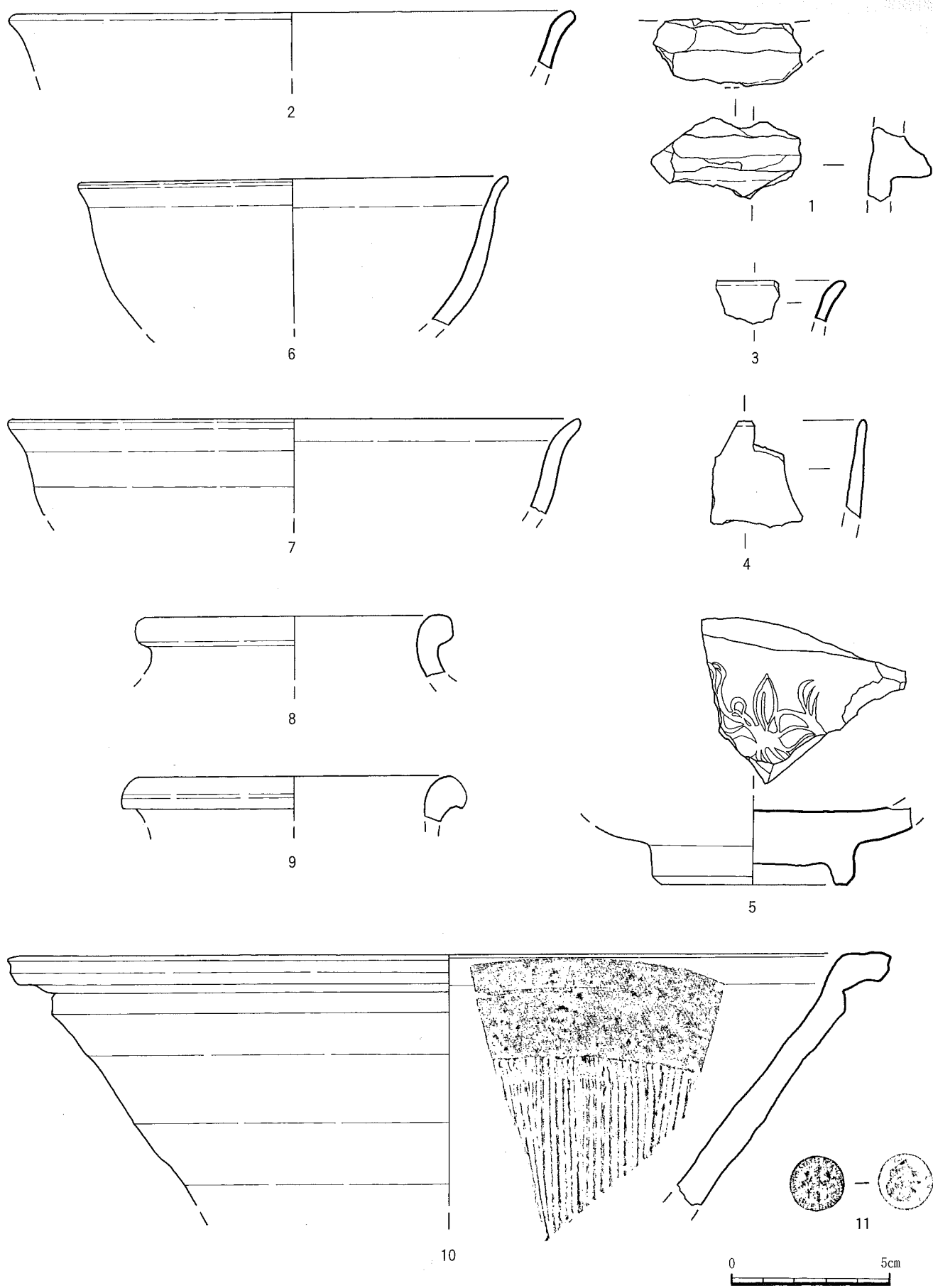


图7 嘉弥真遺跡採集遺物

外面直下で内側に折れ、さらに外側に稜を付けて折れたあと、斜位に胴へ向かう。内面は口唇から約3cm下部に櫛目がある。櫛目は密に12条一組の施文具が用いられ、1mm内外の深さで見込部分に向かってほぼ垂直に引かれる。器色は口縁付近が茶褐色で、胴部が赤褐色。胎土も赤褐色で、赤色の粒子が混入する。器厚は胴部で7mm～10mmを測る。

図7の11は、1954年に製造されたアメリカの白銅製10セント硬貨（ダイム）である。直径18mm、厚さ約1.5mm。

ジョージH. ケア小浜島収集資料内訳

アメリカの人類学者であるジョージH. ケア氏は、1960（昭和35）年～1962（昭和37）年に琉球列島遺跡調査として、県内の144遺跡を踏査している。その中でも先島諸島の遺跡は全体の96%を占める139遺跡におよび、精力的に調査が行われている。この成果については、『沖縄出土の中国陶磁（上）—ジョージH. ケア氏調査収集資料—先島編』³⁶に代表的な資料がまとめられているが、すべての内訳は掲載されていない。ここでは、当館に収蔵されている小

浜島採集資料の内訳を表2に示した。ケア氏による小浜島での採集地は、次の5ヶ所である。ハエバナ遺跡（Haebana Site）、仲宗根村（Nakasone Village）、ニシダバル（Nishidabaru）、道路（Road Side）、ヤサカ遺跡（Yasaka Site）。これらの採集地を分布調査の成果や現存する地名から辿り、照合した結果、ハエバナ遺跡は南風田原遺跡に、ニシダバルはニシダ原遺跡に対応すると思われる。しかし、現在確認されている南風田原遺跡は無土器の遺跡であり、ケア氏が土器片や陶磁器片を採集している点で時期的に符合しない。次にニシダ原遺跡については、ケア氏採集資料が土器の底部片で、分布調査及び今回の調査で採集されている資料も土器や陶磁器といった近世の資料であることから、時期的にも合致するものと思われる。

また、ヤサカ遺跡は、島の沿岸部に散在していたヤサキ村、クァンテ村、カニク村等の集落を、明和の津波以降に現集落に統合したとする伝承³⁶が残ることから、その中のヤサキ村に対応させることができれば、小浜旧部落遺跡の範疇に含んでも良いと考える。しかし、分布調査により確認されている小浜旧部落遺跡は内陸部で、現集落の北側に近接して

表2 小浜島におけるジョージH. ケア収集資料一覧

| No | 採集地名 | 資料名 | 器種 | 部位 | | | | 合計 | 備考 |
|---------|-------------------------|---------|-----|----|----|----|-----|----------|---------|
| | | | | 口縁 | 胴部 | 底部 | その他 | | |
| 1 | ハエバナ遺跡 (Haebana Site) | 土器 | 壺 | | 11 | 2 | | 13 | 南風田原遺跡か |
| | | 青磁 | 碗 | 4 | 16 | 3 | | 23 | |
| | | | 壺 | | 1 | | | 1 | |
| | | 白磁 | 碗 | 3 | 4 | | | 7 | |
| | | | 染付 | 碗 | | 3 | | 3 | |
| | | 褐釉陶器 | 壺 | | 41 | 4 | | 45 | |
| | | | 鉢 | 1 | | | | 1 | |
| | | 本土産磁器 | 碗 | 2 | 1 | | | 3 | |
| | | | 小碗 | | | 1 | | 1 | |
| | | 沖縄産施釉陶器 | 香炉 | 1 | | | | 1 | |
| | | | 碗 | 2 | 1 | | | 3 | |
| 沖縄産無釉陶器 | 小碗 | | | 1 | | 1 | | | |
| | 壺 | | 7 | | | 7 | | | |
| 2 | 仲宗根村 (Nakasone Village) | 沖縄産無釉陶器 | 搦鉢 | | 1 | | 1 | 採集場所不明 | |
| | | | 鍋 | | 2 | | 2 | | |
| 3 | ニシダバル (Nishidabaru) | 土器 | 壺 | | 2 | | 2 | ニシダ原遺跡か | |
| | | | 鍋 | | 2 | | 2 | | |
| 4 | 道路 (Road Side) | 沖縄産無釉陶器 | キセル | | | | 1 | 採集場所不明 | |
| | | | 平瓦 | | | | 1 | | |
| | | 土器 | 鍋 | | | 1 | | | 1 |
| | | | 碗 | 1 | 1 | | | | 2 |
| 沖縄産施釉陶器 | 壺 | | | 1 | | 1 | | | |
| | 鉢 | 1 | | | | 1 | | | |
| 沖縄産無釉陶器 | キセル | | | | 1 | 1 | | | |
| | 鍋 | | 1 | | | 1 | | | |
| 5 | ヤサカ遺跡 (Yasaka Site) | 褐釉陶器 | 壺 | | 1 | | 1 | 小浜旧部落遺跡か | |
| | | | 鍋 | | 1 | 3 | 4 | | |
| 合計 | | | | 15 | 93 | 17 | 3 | 128 | |

いる。このヤサカ村において、ケア氏は土器及び褐釉陶器片を採集していることから、時期的には近世ということで分布調査の成果と共通するが、採集地の特定には至らない。残りの仲宗根村及び道路についても、この名称以外に採集場所を裏付ける記録が見あたらないことから、場所の特定はできなかった。

おわりに

今回の小浜島総合調査は、2度にわたり合計6日間の日程で、次の二つのことを主な目的として調査を実施した。①分布調査等により把握されている遺跡とその周辺環境の変化を確認すること、②可能な限り踏査の際に資料を採集し、遺跡の性格をさらに詳細に把握すること、である。

踏査により確認できた遺跡周辺の現況については、総体的に見て特段変貌を遂げた様子もなく、良好な状況を保っている様子であった。特にユンドウレスク遺跡及びウティスク山遺跡等の石積みを有する遺跡は、現在も信仰の対象になっていることが幸いしたのか開発の手が及ばず、石積みが累々と積み上げられたままの状態に残されている。今調査において、當眞嗣一によりこれらの縄張図が作成され、別項で紹介されているが、今後も継続して調査を進めていくことにより、遺跡の性格がより明らかになることはもとより、島内の近接するスクとの関係及び、小浜島周辺の島々との関係についても判明してくるものと思われる。

しかし、復帰後あたりを頂点としたリゾート開発及び公共工事の勢いは衰えるところを知らず、小浜島の一部では今日も山林原野が切り開かれ、開発が進行している。近年になり、開発側と文化行政との連携もとれ、事前協議により文化財を優先して保護する例も増加してきたが、本稿で新発見の遺跡として報告したイハマムル遺跡の例に見られるように、開発中に発見される可能性もあることから、文化財保護当局は、従来通り開発協議及び事前調査を徹底することはもちろんだが、定期的に分布調査等を行い、状況確認を行う必要性を感じた。また、中でも特に重要な遺跡に対しては、試掘調査及び確認調査により多くの情報を得ることで学術的価値を高めつつ、文化財指定等の適切な保護措置をとり、現

状のまま後世に引き継いでいくことが今後の課題となるであろう。

今回の調査では、延べ6日間という厳しい日程の中で、これまでの分布調査等により報告されている遺跡及び、分布調査以降に新たに発見された遺跡すべてを踏査することができたが、これらの遺跡の外観を観察し、数点の資料を採集することで時間切れになり、ついに現地で詳細な記録を取るまでに至らなかった。これらのことは今後の課題としたい。また、今回報告した周知の遺跡以外の地域においても可能な限り踏査を行うよう努めたが、遺跡と認められる状況は確認できなかった。

最後に、今回の調査を実施し、まとめるにあたり、多くの方々から協力を得ることができた。特に小浜島民俗資料館の慶田盛正光氏、竹富町教育委員会教育長の黒島精耕氏、竹富町教育委員会の仲盛敦氏には、ユンドウレスク遺跡、ウティスク山遺跡、イハマムル遺跡等、場所を特定しがたい遺跡に同行していただき、松原浩氏には、イハマムル遺跡の地名及び伝承等について、現地で多くの有益な教示をいただいた。また、株式会社南西楽園小浜島リゾートの宮崎誠氏には、イハマムル遺跡の確認の際、長時間にわたり対応していただいた。山城直子氏、知念政樹氏には、採集資料の図化等について、伊集ゆきの氏には図版作成にあたり協力をいただいた。記して感謝申し上げたい。

註文献

1. 沖縄県教育委員会、1994. 沖縄県文化財調査報告書第113集『グスク分布調査報告書(Ⅲ)八重山諸島』沖縄県教育委員会
2. 滝口宏編、1960. 『沖縄八重山』朝倉書房
3. 鳥居龍蔵、1894. 「琉球ニ於ケル石器時代ノ遺跡」『東京人類学会雑誌』9巻94号、東京人類学会
4. 鳥居龍蔵、1905. 「沖縄諸島に居住せし先住民に就て」『太陽』第11巻1号
5. 鳥居龍蔵、1905. 「八重山の石器時代の住民に就て」『太陽』第11巻5号
6. 三宅宗悦、1940. 「南島の先史時代」『人類学・先史学講座』第16巻

7. 多和田真淳. 1956. 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『琉球政府文化財要覧』1956年版. 琉球政府文化財保護委員会
8. 2文献に同じ
9. ジョージH. ケア・亀井明德・知念勇. 1982. 『沖縄出土の中国陶磁(上) —ジョージH. ケア氏調査収集資料— 先島編』沖縄県立博物館
10. 琉球大学歴史研究会編. 1967. 「八重山調査報告」『歴史研究 第3号』琉球大学歴史研究会
11. 玉城盛勝. 1969. 「八重山小浜島泊採集石器について」『琉球政府立博物館 館報』琉球政府立博物館
12. 沖縄大学 沖縄学生文化協会. 1974. 「小浜島の先史遺跡概要」『郷土 第13号 八重山小浜島調査』沖縄大学 沖縄学生文化協会
13. 山城浩. 1972. 『小浜島誌』小浜島郷友会
14. 沖縄県教育委員会. 1977. 沖縄県文化財調査報告書第10集『沖縄県の遺跡分布』沖縄県教育委員会
15. 沖縄県教育委員会. 1980. 沖縄県文化財調査報告書第29集『竹富町・与那国町の遺跡 —詳細分布調査報告書—』沖縄県教育委員会
16. 1文献に同じ
17. 11文献に同じ
18. 12文献に同じ
19. 大濱永亘. 1999. 『八重山の考古学』先島文化研究所
20. 14文献に同じ
21. 7文献に同じ
22. 9文献に同じ
23. 多和田真淳. 1960. 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念補遺(一)」『琉球政府文化財要覧』1960年版. 琉球政府文化財保護委員会
24. 14文献に同じ
25. 7文献に同じ
26. 竹富町教育委員会教育長 黒島精耕氏の教示による
27. 金武正紀. 1988. 「ビロースクタイプ白磁碗について」『貿易陶磁研究』第8号. 貿易陶磁研究会
28. 23文献に同じ
29. 14文献に同じ
30. 23文献に同じ
31. 竹富町小浜. 松原浩氏(大正13年4月26日生)の教示による
32. 高良倉吉ほか. 2002. 『日本歴史地名体系第48巻 沖縄県の地名』株式会社 平凡社
33. 石垣市総務部市史編集室. 1995. 『石垣市史叢書9. 参遣状抜書(下巻)』石垣市
34. 14文献に同じ
35. 9文献に同じ
36. 13文献に同じ

参考文献

- 多和田真淳. 1980. 『古希記念多和田真淳選集(考古・民俗・歴史・工芸篇)』古希記念多和田真淳選集刊行会
- ジョージH. ケア・亀井明德・知念勇. 1983. 『沖縄出土の中国陶磁(下) —ジョージH. ケア氏調査収集資料— 沖縄本島編』沖縄県立博物館
- 沖縄県編纂委員会. 1986. 『角川日本地名大辞典 47 沖縄県』株式会社角川書店
- 金武正紀. 1989. 「沖縄における12・13世紀の陶磁器」『沖縄県立博物館紀要』第15号. 沖縄県立博物館
- 沖縄県教育委員会. 1990. 『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅶ—八重山諸島の道—』沖縄県教育委員会
- 安里嗣淳. 1994. 「東京大学研究資料館所蔵の沖縄関係考古資料」『史料編集室紀要』第19号. 沖縄県立図書館史料編集室
- 沖縄県立図書館史料編集室. 1996. 『沖縄県史料前近代1 考古関係資料1』沖縄県教育委員会
- 當眞嗣一. 1998. 「波照間島の考古学」『波照間島総合調査報告書』沖縄県立博物館
- 黒島精耕. 2000. 『小浜島の歴史と文化』
- 大城 慧. 2001. 「西表島の遺跡」『西表島総合調査報告書』沖縄県立博物館